

韓国清溪川視察報告

研究第二部 主任研究員 田村 英記
技術普及部 副参事 山口 将文



1. 清溪川再生プロジェクトの目的

近頃、各種メディアや講演会等にも頻繁に取り上げられ、非常に知名度が高くなった清溪川はソウル市の中心部を西から東へ貫流する延長約11kmの都市河川である。約600年前に李王朝が、現在のソウルを首都として以降、清溪川は人々の生活の場として、ゴミ投棄、下水の流入等、処理場的な役割を果たした一方で、環境の悪化が進んだ(写真-1※)。そのため、1937年から1978年かけて清溪川の覆蓋事業を実施した。この事業は都市環境の改善等の目的に、環境の悪化した清溪川に覆蓋を精力的に行うものであった(写真-2※)。



写真-1 川岸の木造家屋



写真-2 覆蓋化された清溪川

しかし、2002年に清溪川の復元を公約に掲げてソウル市長となった李明博氏は、環境に優しく人間と自然中心の都市空間の再生と、広通橋等の文化遺跡を復元し、歴史と文化が再生された東アジアの中心的都市とするために、清溪川をオープン化する再生プロジェクト(延長L=5.84km)に踏み切った。この事業は2005年10月1日に盛大な通水式が行われ一応の完成を見た。

当プロジェクトは、歴史文化の復元、環境整備、修景、ヒートアイランド対策等の複数の目的を持ちつつ水辺からの都市再生を果たした世界的にも先進的な事例であろう。

2. 現地の整備状況

清溪川再生状況の紹介を行う。まず、写真-3、4をご覧いただきたい。全く別物の清溪川となったことがよく分かる。上流端である事業起点付近は清溪広場と呼ば



写真-3 事業起点付近

れ、ソウル市庁の傍に位置し、ソウル市の新たなシンボリックな場所となっている。また、上流は御影石をふんだんに使った都市的空間であり、下流に行くとともに、自然石を使い、水際の植生にも配慮する一方で、飛び石を伝って対岸に渡れる等、親水性に富んだ自然的な空間となっている。いずれの区画も人々の訪れる憩いの場となっている。



写真-4 下流の散策路

河川水は、自己流量が少ないことから、維持流量を1日に約12万トン地下水や漢江から導入している。水質基準は、BOD 5mg/l以下とし、良好な水質を目差している。このような植生の復元や水質の向上によって、カモの生息が確認できた(写真-5)。



写真-5 カモが生息

3. 最後に

忘れてならないのが、清溪川の水面が都市域の気温を下げ、都市部のヒートアイランド対策となっていることである。この効果に関しては、研究もなされている。

一部の報道では、約390億円の事業費に対し、経済効果は約2兆円とも言われているこの大胆なプロジェクトは、復元

と言うよりも新たな清溪川の創出というイメージが強い。そのような中で、覆蓋化されていた歴史を残すために、高速道路の橋脚が記念碑として存置されていたのが、印象的であった(写真-6)。



写真-6 残された橋脚

※ 写真-1、2はソウル市役所ホームページより引用。